慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	織田作之助『世相』成立に関する一考察： 大阪府立中之島図書館織田文庫蔵「織田作之助宛木村徳三書簡」を視座として
Sub Title	
Author	尾崎, 名津子(Ozaki, Natsuko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2012
Jtitle	三田國文 No.55 (2012. 6) ,p.56- 64
JaLC DOI	10.14991/002.20120600-0056
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20120600-0056

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

織田作之助『世相』成立に関する一考察

――大阪府立中之島図書館織田文庫蔵「織田作之助宛木村徳三書簡」を視座として――

尾崎　名津子

本稿では、織田作之助と木村徳三との関係に着目し、これまで織田の小説『世相』（「人間」昭和二十一年四月）成立に関する伝記的事実として構築されてきた言説と、大阪府立中之島図書館織田文庫（以下織田文庫とする）に収められている木村の織田宛書簡とを照合することで、『世相』成立の経緯をより鮮明にすることを目的としている。

1　編集者・木村徳三と織田作之助

木村は京都市出身で、東京帝国大学文学部仏文科を昭和十二年に卒業後、改造社に入社する。翌十三年に「文藝」に配属され、文芸誌編集者としてのキャリアをスタートさせた。昭和十九年三月からは編集長となるが、同年八月に改造社が解散したため、木村は庄野誠一の手引きで養徳社の京都支社に勤め、終戦を迎える。養徳社は奈良県丹波市（現・天理市）の天理時報社出版部と京都の甲鳥書林など複数の書肆とが、戦時体制下での企業整理によって統合、新設された出版会社で、単行本の刊行が主な事業であり、木村は雑誌編集ではなく、京都在住の学者や文筆家への訪問を業務としていた。雑誌編集を再開するのは、川端康成の依頼により、株式会社鎌倉文庫の雑誌「人間」編集長に就任してからのことである。同誌は木村の次のような意図で編集された。

自分に任された新しい雑誌を、どういう内容の雑誌にすればいいのか、これはおのずと決まっている。私には文藝雑誌以外にできるはずがないし、興味もなかった。とすれば、私はあらためて編集方針に思いをこらしたり考えあぐねることはほとんどなかった。過去六年間にわたる『文藝』編集の経験を通じて、いつしか私の脳裡には望ましい文芸雑誌のヴィジョンが出来上がっていたからだった。それは基本的には『文藝』の小川五郎氏から踏襲したものであり、その上に私の志向を加味し、結実させることなのである。端的に言うなら、文壇的な文芸雑誌でなく、文芸的総合雑誌ともいうべき雑誌であった。一般総合雑誌から政治、経済、法律、科学の面を落して、文学を中心に思想、芸術の域を総合した新しい雑誌――つまり新聞の文化・学芸欄の結晶に近い一種の文化雑誌を作りたかったのだ。(1)

昭和二十一年一月の創刊号目次を参照すると、トーマス・マンのアメリカ各地での講演「デモクラシイの勝利について」（大山定一訳）や西谷啓治「国民文化とヒューマニズム」などの論文のほか、島木健作の遺稿「赤蛙」ほか三本の小説、詩歌、随筆、書簡、海外文学情報など、木村の方針に基づいた多角的な誌面作りに成功していることが窺える。この雑誌の第四号に木村の依頼によって書き上げた織田の『世相』が掲載されたが、二人の交際の始まりは木村の「文藝」時代に遡る。「文藝」誌上で同人誌掲載作品に授賞する「文藝推薦」第一回が昭和十五年七月に行われ、これを受賞したのが織田の『夫婦善哉』（初出は「海風」昭和十五年四月二十九日）だった。当時「文藝」編集部に在籍していた木村は、母校である旧制三高の同窓ネットワークを通して、織田の名前を既に知っていた。[2] 織田の受賞により面識を得た二人は、以来「文通をするようになった」[3]という。これにより『世相』執筆の端は開かれたといえる。

織田の代表作の一つといえる『世相』は、昭和二十年の年末を語りの現在時とし、小説家の「私」が過去の様々なエピソードと現在の状況とを絡め合わせながら輻輳的に語るという構造を持った小説である。エピソードの内容は、いわゆる阿部定事件、千日前大阪劇場裏の殺人事件といった事実に加え、「私」にまつわる挿話（著書の発禁、新聞記者との議論、過去の恋愛、闇市見物）、更に「私」の出入りしていた料理屋の主たちや、同級生・横堀の半生記などが含まれ、種々雑多な挿話群となっている。これらが「私」の語りによって連ねられていくのが、本作の特質といえる。このような構造を練り上げる作業の中で、織田と木村との遣り取りが持つ意味は大きい。

執筆の過程は、大谷晃一『織田作之助』（沖積社、平成十年七月八日）[4]を参照しつつ整理すると以下のようになる。

木村からの「何か自由に書いてほしい」という依頼に応えるため、織田が『世相』執筆にとりかかったのは昭和二十一年一月初旬で、三が日に『六白金星』[5]を書いた直後のことである。そして木村に第一稿を送ったのが同じ一月初旬だったが、木村は「二百枚」あった原稿を短くすることを要求し、返送する。大谷は木村が「阿部定のくだりが四十枚分もあるが全体のバランスを失する、と助言した」と記している。第二稿が上がったのが一月末であり、そこでは「阿部定をすっかり削ってあった」とされており、木村は「阿部定のことも幾らか入れて配列をもう少し配慮したらもっとよくなると思う」との感想をつけて再度返送した。二月初めまでに短篇『神経』[6]を書き上げた織田は、同月十日に『競馬』[7]を脱稿、その他『蚊帳』[8]、『注射』[9]などを同月に書いたとされるが、『世相』の推敲も同時に行ったと考えられる。決定稿となる『世相』第三稿を木村が受け取ったのは、三月十日前後だった。そこでは「第二稿に比べて、姉のタツや千代のこととおぼしき話がなくなっている。阿部定のくだりはまた復活した。第一稿からみると長さが半分になった」とされている。

この間の織田の動向については、青山光二宛織田作之助書簡（昭和二十一年一月二十五日）[10]にも明らかである。

正月から三つ小説書いた。「新生」に五十枚、「人間」に百枚という長いのを書いたが、題は「世相」――これは失敗したかも知れない。阿部定の話を入れて、今日の世相を書いた。得意の題材だから、凝りすぎて、妙な私小説にしてしまったが、しかし形式はこれまで日本になかった形式だ。

これらをふまえ、織田と木村の往還を簡潔に纏めると次のようになる。①第一稿は昭和二十一年一月上旬に書かれた。②木村は原稿を短くすることを求め、即座に返却した。③第二稿は一月末までに書かれた。④木村は削った部分を一部入れることなどを求め、再度返却した。⑤第三稿（決定稿）は三月上旬までに書かれた。

以上を前提として、現存する木村の書簡を参照してみたい。

注

（1）木村徳三『文芸編集者の戦中戦後』（大空社、平成七年七月二十一日）。木村の仕事に関し、自身が書いたものとしては『文芸編集者　その跫音』（TBSブリタニカ、昭和五十七年六月）が人口に膾炙しているが、『文芸編集者の戦中戦後』はこれを底本とし、加筆修正を加えたものである。

（2）「私が織田作之助氏を直接識ったのは、彼の出世作「夫婦善哉」が第一回〝文藝推薦〟作品となった後のことである。しかし、旧三高では私より一、二年後輩だったし、オダサクの通称とその言行は青山光二君あたりからよく聞いていたので、面識がないにもかかわらず以前から知り合いのような気がしていた。」（注（1）に同じ。）

（3）注（1）に同じ。

（4）この評伝はそれまでに認められていた織田に関する資料に加え、関係者二四一人に行った聞き取りを元に書かれており、典拠が逐一示されているわけではないが「定本版のための後書き」に「一言一行もフィクションはない」と断りがある。

（5）「新生」昭和二十一年二月

（6）「文明」昭和二十一年四月

（7）「改造」昭和二十一年四月

（8）「大阪新聞」昭和二十一年三月一日

（9）「夕刊新大阪」昭和二十一年三月三日

（10）『織田作之助全集　第八巻』（文泉堂書店、昭和五十一年四月二十五日）所収

2 【翻刻】大阪府立中之島図書館織田文庫蔵 織田作之助宛木村徳三書簡

織田文庫所蔵の木村徳三による書簡は、葉書三枚、便箋五枚（二通分）の計五通であり、内容は一通目を除いてすべて織田の小説『世相』の執筆に関わるものである。

凡例

一、「書簡（アラビア数字による番号）」とあるのは、織田文庫目録の整理番号である。

一、原則として書簡を忠実に翻刻し、仮名遣い、漢字の誤りもそのまま残した。

一、変体仮名は、通行字体に改めた。漢字は、原則として常用漢字を使用した。

一、本文の繰り返し記号は、そのままとした。

一、文字が塗りつぶしてある箇所についてはその文字に二重取消線を付した。
一、斜線「／」は改行を示す。
一、翻刻者による説明を〔　〕で示した。

【一通目】　書簡１２３　昭和十九年十月二日、葉書、活版刷

〈表〉　大阪府南河内郡野田村／丈六／織田作之助様／東京市芝区新橋七丁目十二番地／改造社『文芸』編輯部／木村徳三

〈裏〉　謹啓御清適の御事とお慶び申し上げます。／さて今般弊社の廃業にともなひ「文芸」も改造社発刊雑誌として／は去る七月号を以て終刊いたすこととなりました。／昭和八年十一月創刊以来足かけ十二年間、幸ひに大過なく、些か／なりとも我が文学の発展に寄与し得ましたことは、ひとへに皆様／の多大の御愛顧と御支持の賜と、省て深く感謝してゐる次第です。／終刊に際しまして厚く御礼申し上げます。／時局は愈々緊迫してまゐりましたが、何卒一層御自愛の上益々御／活躍下さいますよう御祈り申します。敬具／昭和十九年八月

〔改造社が解散した時に各方面に送った葉書である。木村による書き込みはない。〕

【二通目】　書簡１２４　木村徳三　昭和二十年十二月二十三日、封書、用紙は「株式会社鎌倉文庫」ネーム入り縦書き便箋

〈一枚目〉　その後御無沙汰しました。在京中に一度お目にかゝりたいと／思ひながら九月末以来文字通り東奔西走のかたちで慌しく／過してゐましたのでその機を得ず残念に思つてゐます。漸く／「人間」創刊号も数日中に発売の運びとなり一安堵して／ゐるところです。この二三ヶ月は東京半月京都十日と云つた工合に／落着きませんでしたが、色んな苦労をして数日前に家族をつれて／もとの本郷に定住することになりました。それにしても実に／奇妙な気持ち奇妙な年の瀬です。如何です？／お元気ですか。あなたに好（ママ）みの風景、いはゞ織田作的世界が到る所で／展開されてゐる世相と感じますと云つたら失礼でせうか。此の間上京／された宇野さん[1]から聞いたことですが、出版のことを始められる由、柴野さん[2]と／一しよにやられるのではないかと推測してゐますが、新機軸の文芸／雑誌を期待してゐます。／ところで「人間」のために小説をお送り下さいませんか。枚数など／拘泥されずに思い切り書いて貰ひたいのですけれど、如何でせうか？

〈二枚目〉　終戦後の小説もまだこれと云つた作品は出ませんし、あなたなど若い／作家に縦横に大胆な筆を揮つてもらひたいものです。これは私の勝手／な希望なりお願ひで恐縮なのですが、「人間」では大体既成作家の／作品が今までのところ主になり、若いひとの作品は佳作がなくて困つて／ゐるのですが、既成作家のものをかすますやうな新人の作品を／希んでゐるのです。それでひとつあなたあたりの力作が是非ほしいのですし、／「人間」に発表された新人作品は必ずいゝものだといふことを江湖に示して／みたく思つてゐます。そのため新人の作

品は一度読ま／せて貰つて在来の作品以上と思へるもののみを載せさせて貰ひたい／ので、その点御諒承の上（実際センエツな云草ですが）お書き／願ひたいのです。と云つてもこれは私の希望であり創作欄の編輯方／針をまあ同窓のよしみで並べたてただけで、そんなことはお読み／過しの上で思ふ存分お書き下すつたら結構なのです。出来れば／来月の十五日迄に送つて下さいますと倖ひです。よろしくお願ひ／します。

〈三枚目〉 もし来上なさることがあるやうでしたら御立寄り下さい。日本橋／の白木屋の二階です。川端、高見氏[3]なども殆ど毎日出て来て居り／ます。／近頃は身体の調子は如何です。くれ〳〵も御自愛下さるやうに――／十二月二十三日夜／人間編輯部／木村徳三／織田作之助様

（1） 宇野浩二のこと。

（2） 柴野方彦は織田の旧友で共に「海風」の同人だった。柴野は昭和二十一年に京都で世界文学社を興したのち雑誌「世界文学」を発刊し、織田はその創刊号（昭和二十一年四月）で『夫婦善哉後日』の連載を始めたが、二回で中断した。

（3） 川端康成、高見順のこと。

〔「人間」への執筆依頼の書簡。〕

【三通目】 書簡１２５　昭和二十一年一月十八日、葉書

〈表〉 大阪府南河内郡富田林／寿町／竹中国次郎様方[1]／織田作之助様／東京都日本橋区通一丁目九番地／白木屋内／株式会社鎌倉文庫／木村徳三

〈裏〉 前略只今「世相」お受取りしました。早速／読ませて頂きます。中々力作らしく期待してゐます。／いづれお読みしました上、御返辞申します。／今日は人間二月号校了前々日で少し忙しい／ものですから、取敢えず御受取報告及び御礼のみで――／御自愛下さい／匆々／十八日

（1） 竹中国次郎は、織田の長姉タツの夫である。この時期織田は野田村の自宅を出て、姉の家に居候していた。

〔『世相』第一稿受領の連絡。〕

【四通目】 書簡１２６　昭和二十一年一月三十日、封書、用紙は「株式会社鎌倉文庫」ネーム入り縦書き便箋

〈一枚目〉 御手紙拝見。なか〳〵お元気で、作家的食慾旺盛の御様子、／大変うれしく存じます。大いに御活躍下さい。この間あなたに書いて／頂いたのと同時に色んな若い方に（倉光俊夫、石塚友二、北條誠氏[1]／など）読ませて貰つたのですが、一番新しい小説のことを考へて／ゐるのはあなたでその点大変欣びました。／ところで「世相」ですが、もう一度スイコウして頂きたく早速御返送し／ました。と申しますのはやはり作品としては少し醇化されてゐなく、もうひと／つなま（失礼ながら）なやうに思ひます。意図は非常に興味深く／これがうまく

ゆけば確かに我々ジエネレーションのロマンといふ気がいたします。／逃亡の原稿及びその出し方それを挿入することのよしあし、についても／御考慮下さい。たゞ一つのまとまつた短篇としましたなら復員闇屋の／件だけを扱へば好短篇となりませうが、それだと在来のあなたの小説の／域を脱し難いかも知れません。それでとにかく御返送致しましたから、／勝手な注文を申しまして恐縮ながらもう一度スイコオ（ママ）のことお願ひ／いたします。

〈二枚目〉 あなたが「フアビアン」[2]を好んで読まれた由を知りまして、正に我意を／得た感じ、日本の「フアビアン」の出現を心から待つてをりますことを／強調して書き添へておきます。／取急ぎ御願ひまで、くれ〳〵も失礼の点お許し下さい。／尚原稿出来れば二月二十日迄にお送り願ひたく存じます。／三十日／「人間」／木村徳三／織田作之助様

（1） 倉光俊夫は昭和十八年に『連絡員』で第十六回芥川賞を受賞している。石塚友二は俳人としての方が名高いが、戦中から小説を書いてもいた。川端康成に師事していた北條誠は、この時鎌倉文庫の社員でもあった。

（2） エーリッヒ・ケストナーの小説『ファビアン』（一九三一（昭和六）年初版）のこと。邦訳は小松太郎によって「作品」昭和七年八月号以降順次発表され、纏まったものとしては小松訳『ファビアン――或るモラリストの話』（上）（下）（改造社、昭和十三年八、九月）が初刊である。第一次大戦後、ナチスの台頭が目立ってきた時期のベルリンの頽廃的な風俗を前提に、主人公ファビアンの厭世的でありながらモラルを打ちたてようとすることによる葛藤を記したこの小説を、織田は『夜の構図』（「婦人画報」昭和二十一年五～十二月）執筆の際に参照している。

〔第二稿を受けての木村の感想および原稿返送の旨が書かれている。〕

【五通目】 書簡１２７　昭和二十一年三月二十五日、葉書、速達便

〈表〉 兵庫県川辺郡小浜村／米谷一七ノ二[1]／織田作之助様／東京都日本橋区通一丁目九番地／白木屋内／株式会社鎌倉文庫／木村徳三／三月二十五日

〈裏〉 大変通知が遅れまして失礼しましたが／御稿たしかに頂戴しました。相変らず／面白かつたです。（多くはいゝ意味で、少しは／悪い意味で）四月号にお載せする予定／です。最後の妹を書かうと思ふ件は／伏線がはつてあるとは云へもう一つピツタリ／しなかつたやうです。いづれ又――取急ぎ――。

（1） 織田の住所が「兵庫県川辺郡小浜村米谷」となっているのは、織田が声楽家の笹田和子と再婚したことを受け、転居したことによる。

〔決定稿受領の連絡である。〕

3　考　察

「2」で紹介した書簡のそれぞれに対する意味づけを以下に行いたい。

〈一通目〉は二人の関係が戦中から築かれていたことの傍証の一つといえるだろう。

『世相』に関わる最初の書簡である〈二通目〉では、それが織田に届くであろう昭和二十年十二月二十三日以降から翌二十一年一月十五日までの約三週間という非常にタイトな日程の中で原稿が求められていたことがわかる。そしてまさにその短期間で織田は『世相』を書き上げた。当然、木村の依頼より以前に構想は芽生えつつあったと考えることは可能で、阿部定の挿話を書く際に参照した彼女の公判記録の写しは、昭和二十年の晩秋に入手したとの証言もあるが、残っている書簡・日記・ノートの類から、織田が依頼までに『世相』を書き始めていたことの確証は見出せない。ゆえに〈三通目〉と併せて考えても、第一稿の完成は昭和二十一年一月上旬で間違いない。また、〈二通目〉に見られる「あなたに好みの風景、いはゞ織田作的世界が到る所で展開されてゐる世相と感じますと云つたら失礼でせうか」という一文は、『世相』テクストにも摂取されていると考えられる。第七章の「世相は私のこれまでの作品の感覚に通じるものがあり、いわば私好みの風景に満ちている。横堀の話はそれを耳かきですくって集めたようなものである。けちくさい話だが、世相そのものがけちくさく、それがまた私の好みでもあろう」という一節が、木村の文言と対応するといえる。

一方、編集者の手紙として〈二通目〉を読むと、「「人間」では大体既成作家の作品が今までのところ主になり、若いひとの作品は佳作がなくて困ってゐるのですが、既成作家のものをかすますやうな新人の作品を希んでゐるのです」という部分は、「人間」編集長としての木村の編集意図が浮き彫りになっている。創刊されたばかりの「人間」は木村自身が「事大主義的なほど既成大家や巨匠が名前をつらねていて、羽仁氏の批判（この引用箇所の直前では、「人間」創刊号に対し羽仁五郎が「パンをもとめて石を投げられた」と評したと書かれている――引用者注）があながち当を得ていなくもないほどの保守的な執筆陣である」（前掲『文芸編集者の戦中戦後』）と振り返るとおりだった。鎌倉文庫の人脈を活用した執筆陣を考えればこの批判は必然だが、木村はそのままでは満足せず、雑誌に保守脱却の志向を持たせようとしていた。その証左がこの書簡といえるのではないだろうか。〈四通目〉と綜合してみると、既に各文学賞を受賞し、作家としてのキャリアが形成されつつあった織田や倉光らをひとしなみに「新人」とする姿勢にも、その志向はあらわれている。

〈三通目〉は第一稿執筆時期確定の証左となるだろう。そして『世相』のタイトルはこの時点から一貫していたこと、多忙な中でも受領の連絡だけはするという、編集者としての木村の細やかさも明らかだ。

〈四通目〉は第二稿への応答と考えられる。第一稿に対する木村のコメントは織田文庫に残されていないが、この書簡には

「もう一度スイコウ」「もう一度スイコオ」とあるからだ。すると、推敲の一回目は一月一八日以降同月末までのごく短期間になされたはずである。この書簡の冒頭からは、織田が第二稿を送ると同時かその前後に、木村に手紙を送ったことがわかる。その中に『ファビアン』に関することも書かれていたと推測され、この作品に対する両者の強い共感が窺える。また、「これがうまくゆけば確かに我々ジェネレーションのロマンといふ気がいたします」とあるが、世代観は『世相』の主要なテーマの一つであるものの、これに近似した言い回しはテクストにはなく、手紙で織田が「我々ジェネレーションのロマン」に類する文言を記したと推測される。

〈四通目〉で木村は織田の原稿に対して様々に評価を為している。要点は織田が同程度のキャリアの作家の中でも「一番新しい小説のことを考へてゐ」ると認めるが、『世相』は作品としては未だ完成とは捉えられず、ただ「意図は非常に興味深」いということだ。この評価はのちに織田の初版『世相』（八雲書店、昭和二十一年十二月）「あとがき」での「『世相』は「人間」編集長の木村徳三氏の激励に負ふところが多い。この形式は苦しまぎれに作りあげた形式だが、かうした小説の形式の新しさは、ひとは気づいてくれなかつたやうである。」という自作への評価へも影響を与えている。「新しい小説」に自覚的で、そのための「意図」の用意もあるという木村の織田評価は、「意図」が作為を指すがゆえに、「形式の新しさ」を目指したという作家の自己評価の礎と捉えられる。木村の励ましは織田の『世相』に対する自負へと醸成されたのである。一方、木村が「一つのまとまつた短篇としましたなら復員閣屋の件だけを扱へば好短篇となりませうが、それだと在来のあなたの小説の域を脱し難いかも知れません」と書いたのは卓見だといえる。「復員閣屋の件」とは作中人物である横堀を描いた部分で、半生記のスタイルを採っている。織田は『夫婦善哉』をはじめそれまでほとんどの作品を半生記や立志伝の形式で構成しており、木村が織田の旧作を十分に読んでいたことが窺える。

先に参照した大谷の整理では、第二稿の感想として木村が「阿部定のことも幾らか入れて配列をもう少し配慮したらもっとよくなる」と述べたとしているが、この書簡には阿部定のことも、配列への配慮も書かれていない。指摘は「逃亡の原稿」の採用可否を考慮せよということと、横堀の挿話に対するものであり、前者については阿部定を指すことの確証がなく、何を指すのかが不明だ。また、この時点で枚数の軽減は要求されていないこともわかる。ただ、この書簡には、のちに作家の自負につながる編集者の励ましと、文学観をめぐる共感が認められ、作家と編集者間の信頼の構築を見て取れる。

〈五通目〉は掲載の通知である。載せると決めてもなお木村は『世相』への批評を行っている。それが小説の結末に対する「伏線がはつてあるとは云へもう一つピツタリしなかつたやうです」という評価である。先にみたように、織田は第一稿か第二稿に関わっていた一月二十五日の時点で、青山光二へ『世相』が失敗作であるとの述懐を送っているが、木村の感想は作家本人の認識を補強する。

編集者の担う役割は、出版社や出版事業の社会的な役割に応

じ、時代によって性格が変わるものだといえる。戦後に河出書房から復刊された一九六〇年代の「文藝」と、八〇年代の「海燕」を編集し、中上健次や吉本ばななを発掘したといわれる寺田博と、七〇年代に「ユリイカ」「現代思想」を編集した三浦雅士との対談「いま、編集者とは何か」（寺田博編『時代を創った編集者１０１』（新書館、平成十五年年八月二十五日）で、両者は文芸誌における編集長独裁の必然性について次のように発言している。

寺田　「文藝」の場合は、坂本一亀が全権限を掌握していました。まさに独裁。とくに載せるか載せないかについては、坂本編集長の胸一つです。他の文芸誌では編集部員が作品を回読し意見をいい合うこともあったようです。「文藝」はそういうことはあまりなかった。

三浦　他の文芸誌というのはたとえば何ですか。

寺田　「新潮」は部員が回読すると聞いたことがあります。だから新人の原稿はとくに掲載まで時間がかかった。

三浦　そうなんですか。独裁者がいた上で回読するのは悪くないですよね。独裁者に反対する編集者がいるのもいい。悪いのは、責任ある独裁者なしに、すべて多数決で決まってしまう場合ですね。数学の答えを多数決で決めるようなものですから。そこからは何も生まれないんじゃないかな。

寺田　文芸誌はおおむね掲載作品は編集長が決めていると思います。文学賞の選考委員がいま、民主主義的に多数決で作品の良し悪しを決めるという形になっていますね。やむを得ないことでしょうが。私は掲載を決めたり、目次の何番目に誰を入れたりとかいうのは編集長独裁のほうがいいと思います。

独裁という穏当でない表現を敢えて用いて二人が述べているのは、自身の文学の見取り図を描き、それに従って一号の雑誌を作るという、採算度外視が可能だった頃の編集者像である。引用部分のあと対談は文学の見取り図、すなわち木村が述べた文学の現状や今後を含めた全体を見通す「ヴィジョン」を提示する人が少なくなった現代に射程が及ぶが、木村徳三は、二人のいう「ヴィジョンある編集者」の典型といってよい。

このような人物に鼓舞され、批評されつつ、織田は『世相』を改稿し、また編集者の評価を内面化していった。展開の舞台を多く文芸誌と総合雑誌とに求めてきた日本近代文学を考えるうえで、作家と編集者との関係が作品それ自体に与えた影響は決して小さくない。『世相』の場合はまさに作家と編集者との共同作業で作品が「編集」されていった形跡を辿れる好例と見ることができる。